

気仙沼ニットイングはエルメス、虎屋に学ぶ 100年続く企業にするためにやっていること

「世界中のひとに求められるものをつくっていききたい」。

「気仙沼ニットイング」はそんな信念を掲げて誕生した

100年続く会社を作ること。100年続く老舗をめざすこと。100年続く事業を育てること。

本書『[気仙沼ニットイング物語:いいものを編む会社](#)』（新潮社、御手洗瑞子著）には100年という言葉が何回も出てくる。

学ぶべき先輩企業は創業180年目を迎えようとしているエルメスや、室町時代からつづく和菓子の虎屋だという。

この気宇壮大な目標を持つ会社の名前こそ、本書のタイトルにもなっている「気仙沼ニットイング」である。

2013年、気仙沼に創業

ニットイングの広義は編み物一般だが、狭義はおもに2本の長い棒を使う棒針編みのことだ。両手に棒を持ち、人差し指を器用に動かして、マフラーやセーターを作る手芸だ。アマゾンの本売り場で「編み物」を検索すると5786点もの書籍や雑誌がヒットする。日本ヴォーグが発行する季刊誌「毛糸だま」の発行部数は5万6000部だ。多くの人々にとっては家庭内での実益を兼ねた趣味だ。しかし、気仙沼ニットイングはそれを生業にする会社として2013年6月6日に誕生した。

古来6歳6月6日は習い事をはじめめる吉日と言われてきた。この会社の母体となったのは、糸井重里さんと「ほぼ日」である。6月6日を意識していないはずはない。設立から3期目のこの会社は、すでに利益を計上しているとはいえ、まだまだ「9歳」になったばかりの幼子だ。本書をこれからの覚悟をしたための決意書として読んだ。

著者は気仙沼ニットイングの創業者。東京大学経済学部を卒業し、戦略コンサルティングファームのマッキンゼー・アンド・カンパニーに就職した女性だ。ブータン政府では初代首相フェローとして産業育成に従事していた。どれほど目から鼻に抜けるような才女であろうと構えて本書を読み進めたのだが、そこにはたおやかで優しい眼差しをもつ、小柄で元気なお嬢さんの姿しか見えてこない。本書冒頭のプロローグを読むだけで、いかに肩に力が入っていないかよくわかる。

戦後日本人は焼け跡から高度成長期、バブル期から停滞期を経て、ついにある意味で日本人の理想形として、いま30歳以下の若者たちを作り上げてきたのではないか。自然体で強欲ではなく、知識を備えて現場に立ち、どこか謙虚でチャーミング。その典型としての人物像を本書で見ることができるかもしれない。彼らこそわれわれ中高年が苦労して作り上げた作品だと思えば、誇らしい気もしてくる。

気仙沼ニットイングが目指すもの

とはいえ、彼女の決意は固い信念をともなうものだ。この会社が目指すものとは

「誇り」をもって仕事をしていきたい。

だれかに、よろこばれることが実感できるような仕事を、編んでいきたいと考えています。

「うれしさ」を伝えていきたい。

編むことのうれしさが、着てくださる人に伝わって、何年も何代にも渡って愛されていくようなニット。そんな商品をデザインし、つくり、お届けしていきます。

気仙沼の「稼げる会社」になりたい。

被災地であることが忘れられても、

しっかりと暮らしの糧を得られる会社になりたい。

その経営の基盤を気仙沼につくっていかうと考えています。

世界中のひとがお客さまに。

日本だけでなく、世界中のひとに求められるものをつくっていく。

東北の気仙沼(Kesennuma)という地名が、

素敵で高品質なニット商品を生み育てる場所として、

世界に知られていきますように。



というものだ。編み手を筆頭とした社員はもとより、株主を含

めたステークホルダーの誇り。美しくて高品質、世に残る商品がもたらす満足感。収益性の確保による事業の永続性。そしてグローバルブランディングへの挑戦である。立派な経営計画である。本書の読み方はいろいろあろう。東日本大震災からの復興支援という視点もある。しかし、ビジネスマンにとっては良質なビジネス書として心を落ち着けて読むことができる好著だ。

ところで、この事業をここまで育てた立役者は著者だけではない。傑出したニットデザイナーである三國万里子さん、プロジェクトのバックエンドを支えている斉藤和枝さんのお二人はその中心人物なのだが、それ以外にも斉藤家の「じっち」や「ばっば」など魅力的な人たちが登場してくる。著者によれば、気仙沼の人はオープンで、国際的で、どこかハイカラだという。読者は気仙沼という風土の面白さや、地方都市の醍醐味も味わうことができるであろう。

気仙沼ニッティングの旗艦商品は MM01 というオーダーメイドのカーディガンだ。順番を待つ必要があるらしい。価格は 15 万 1200 円だ。これが高いか安いかは買う人の使い方次第であろう。

手本はアイルランドの漁師が着ていたセーター

アイルランド・アラン諸島へ訪れた時の御手洗 瑞子さん(右端) かつて白洲次郎は「ツイードなんて、買ってすぐ着るものじゃないよ。3年くらい軒下に干したり雨ざらしにして、くたびれた頃着るんだよ」と語った。ハリスツイードはイギリスのハリス島の漁師たちの定番ジャケットだった。イギリスのカントリージェントルマンはそれにならい、わざわざボロボロになったツイードジャケットを着て粋がっていたのだ。



気仙沼ニットイングはMM01を創るにあたり、アイルランドのアラン諸島に取材に行っている。

手編みのアランセーターこそがお手本なのだ。そのセーターこそアラン諸島の漁師が船の上で着る作業着だったのだ。長年にわたって着ることができるジャケットやセーター。いや、時間をかけて着古していくことに価値のある宝物が15万円だとしたら安い買い物なのかもしれない。



かの地では驚いたときには「ばばば」というのだそうだ。久しぶりに道で出会うと「ば!」、もっと驚くと「ばばあ!」最上級が「ばばば!」らしいのだ。MM01を注文して順番を待つことにしようと思う。もし、自分の順番がきたら「ばばばば」と驚きながら、採寸のために気仙沼に行ってみようと思う。

<経営のヒント>

3月のTV東京「カンブリア宮殿」で、気仙沼ニットイングと麴屋本家が取り上げられた!

ニットのセーターが15万円

手編みで、特注品だから織り手が4人しかいないそうだ。

だから注文してから、2年も掛かる!

オーダーした人は手元に届くまでの時間も至福の時間となるようだ。

オーダー1番は、高倉健さんだと。

この話を聴いて、私も無性に欲しくなった!

(だって、高倉健さんは故郷の高校の先輩だからね・・・)

関係ないけど、ちょっと誇りに思えます。